

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

織田家は、室町幕府の管領(將軍補佐)で越前国など複数の守護職を持つ斯波氏の家臣として、尾張国の守護代を務めた家柄です。地方武士にすぎなかった織田信長の先祖のうち、祖父信貞は勝幡城(愛知県稲沢市)を拠点に港町津島(同津島市)を支配して経済力を蓄え、父信秀は今川氏豊から那古野城(同名古屋市)を奪って、政治力を拡大しました。

信秀の三男として天文3(1534)年に生まれた信長は、同21(52)年に病死した父の家督を継ぎ、永祿3(60)年には、尾張に攻め込んできた今川義元の大軍を桶狭間の戦いで破ったことで、一躍脚光を浴びました。名古屋の熱田神宮にある「信長塀」は、桶狭間戦勝御礼として信長が奉納した土塀で、土と石灰を油で練り固め、瓦を積み重ねた構造です。

やがて足利義昭を奉じて上洛した信長は、京都を抑え、近畿周辺を支配下に入れて、全国統一に乗り出します。西日本では、中国地方の毛利輝元と信長が対立する一方、九州では、天正6(78)年の高城・耳川合戦以降、大友義鎮(宗麟)と島津義久の関係が悪化した状況でした。

織田・毛利・大友・島津それぞれが思惑が交錯する中、天正9(81)年3月、信長は、公家

織田信長 大友と島津の和睦を勧告



熱田神宮(名古屋市)の「信長塀」

の近衛前久を通じて、島津義久に意向を伝えます。「島津家文書」に伝わるその内容は、次の通り。

「去年豊薩両国和睦の事、御朱印をもって申し下さるの上は、たとえ御存分候といえども、意趣を差し置かれ、無事の段然るべく候、その故は、芸州に至り図らず行に及ばざるべきの由に候の間、相滞るに於いては、あわせて天下に對され支えたるべく候の条、御分別專一に候、委曲は伊勢因幡守に申し含め候いき、なお道此申すべく候」

「去年」天正8(80)年、織田政權としては、九州内で対立する大友氏と島津氏に「豊薩

両国和睦」を勧告している。たとえ思ふところがあろうとも、和睦勧告の意義を理解し、小競り合いをやめるべきだ。なぜなら、これから「芸州」(毛利輝元)を攻めるに際して、九州の両大名が対立状態では都合が悪く、「天下」静謐の支障になるからだ、との文意です。

書状から、信長にとつての「豊薩両国和睦」は、自らが進める毛利攻めの後方戦略だったことが読み取れます。一方、勧告の履行を島津義久に運達する使者として、室町幕府奉公衆の伊勢貞知に加えて、大友義鎮と親交の深い堺豪商天王寺屋道比が薩摩に下つていくことから、この和睦斡旋は、織田信長を抱き込んだ大友義鎮の意図に沿って進められたことも分かります。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1日掲載